

佐賀(善) 朝起きて、水や風の具合で大体その日の漁は判断出来たよな。

折本 そうだね。大体風が吹かないと水の色はきれいでね。澄んでいたもんです。そして大風が吹くと水が汚れて赤くなるんです。そうすると魚が視界が効かなくなつて、網が見えなくなるから、よく取れたもんです。それからワカサギは風下に集まるんですね。だから西風が吹けば麻生方面、南風が吹けば出島沿岸、北風が吹けば稲敷方面、という風にだいたい見当がつきます。それから月の夜は駄目です。それは決っています。魚獲量は三分の一ぐらいでした。

佐賀(善) 昔は、ワカサギが帯のように群をなして泳いでいるのが見えたもんだよなあ。

折本 そう。

人間が一日のうちで寝る時もあれば起きてめしを食う時もあるように、魚も一定の時間に餌を探しに出るんです。これを「まずみ」といっていましたね。れい明、日没がこの時で、漁師はこの時をねらつて漁をするんです。船に乗っていて、ワカサギが帯のように群を組んで泳いで来るのがよく見えました。ドウドウドウ水の色が違って、黒くなる程物すごいものでした。ほん

でも早いんです。あっちの湖面に一群、こっちの方に一群と、はっきり移動するのが見えるんです。だからその群のいる方向に船を寄せていくんですが、このカーブを切る方法を「エズを切る」と言ったんです。そして腕のいい者は思った方向へ行くけれども、悪い人はその方向へ行けない。だから腕の良し悪しです。いぶん魚獲量がちがったわけです。

佐賀(善) まあ、ワカサギの群が見えただってことは、水がものすごくきれいだったということだよ。今とは比べものにならない。

飲み水も茶をわかすのも、湖の水を使った。飯も炊いた。霞ヶ浦の水を使ったのは漁民ばかりではない。

湖を航行する定期船や貨物船の飲む水はみんな湖の水で茶をわかしたもんだよ。まあ中には、船の中から湖の上へおしっこをする人もいた。しかし、昔の人は、波が三つ立てば、水はきれいになってしまふと言っていたもんだ。井戸の水より僻がなくていいと言っていた。まあ、科学的に分析すればどうだったかしのれないが、とにかく生水を飲んでも下痢したり、腹をこわしたりしたなんてことはなかった。

折本 ほんとに、全部霞ヶ浦の水を使っていたんですよ。とにかく水はきれいでした。昭和二十年頃から動力船